

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

要覧 1983





目 次

概 要

歴史と性格 .....	1
組 織 .....	2
職 員 .....	4

研究活動

共同研究プロジェクト .....	6
共同研究員(公募) .....	11
研究生 .....	13
研究部門図 .....	14
言語情報機械処理 .....	16
言語研修 .....	17
海外学術調査 .....	18
助手等の現地投入 .....	19
外国人研究員 .....	19

施 設

電算機室 .....	21
図 書 室 .....	22
音声学実験室 .....	23
出版物一覧 .....	24

—表紙写真説明—

—メラネシア系原住民部落における葬儀の準備—

通常の死者の葬儀では親族関係に基づく儀礼が行われる他はキリスト教の葬儀と何ら異なる。しかしその死者が部落の長の場合には特別な儀礼が行われる。葬儀参加者全員が身体を黒く塗ってダンス・会食・金品の交換などの儀礼を時間を無視するがごとく延々と行う。その精神は亡くなった最高司令官を英雄としてたえるものようであるが、やはり時代の流れには逆らえない。この写真は葬儀参加のために身体に墨を塗っているものであるが、本来顔はもとより身体全体をまっ黒に塗るべきものも顔だけちょっと黒くしてお茶をにごす。特に若い女性には評判が悪いようである。またこの墨も元来ある種のきのこに付着している黒い粉を使っていたようであるが、現在では木炭を使っている。(ニューカレドニア：新谷忠彦)

# 概 要

## 歴史と性格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究、これらの地域における諸言語の辞典編纂、および教育訓練を行うことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語、およびそれを通じて、これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため、言語研修を実施すること。

以上の三点が本研究所の主要な目的です。

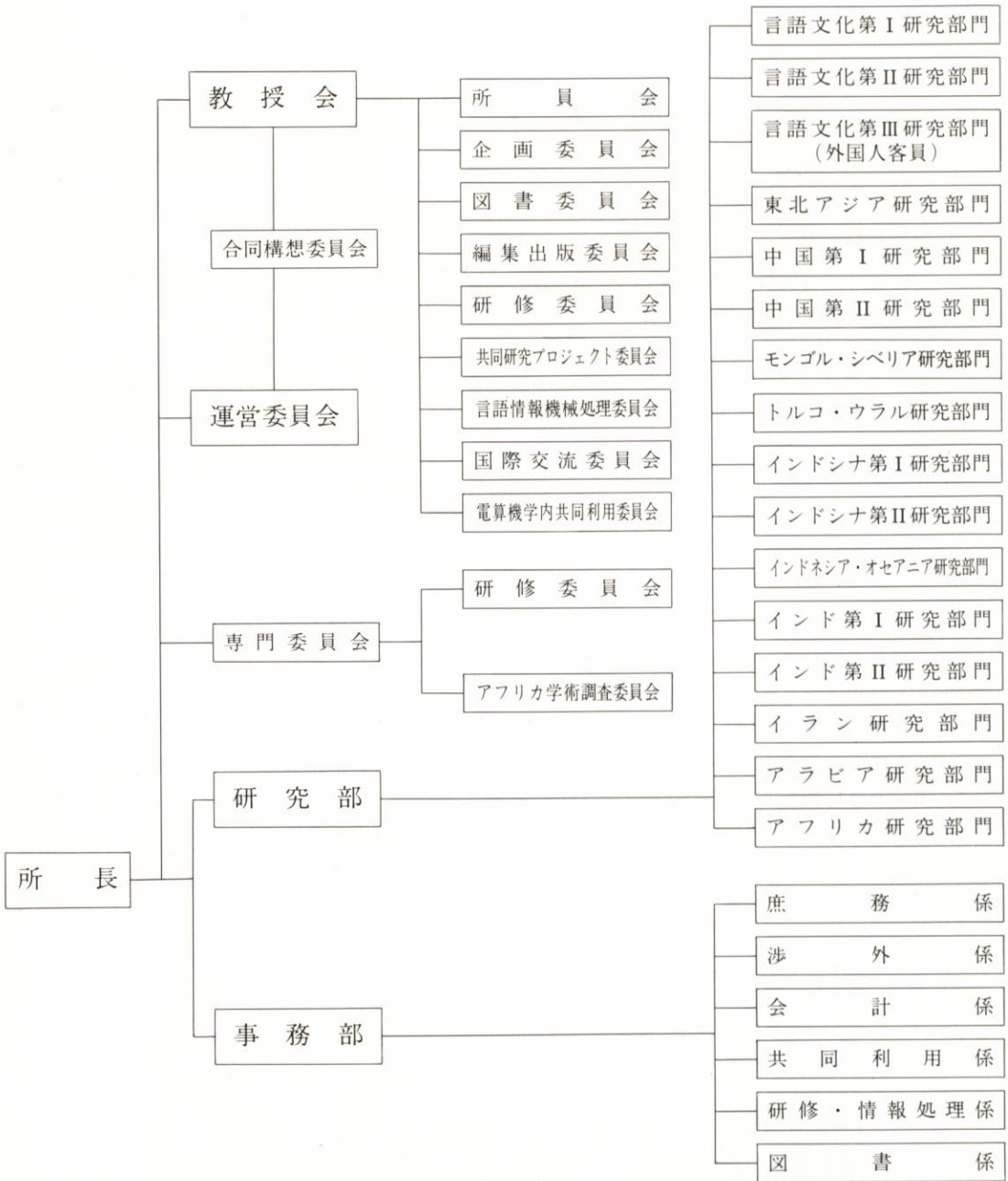
\* \* \*

共同利用研究所は、あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し、相互の接触や交換の機会をつくり、それによって研究の発展・進歩を促すことを目的としています。

戦後日本の復興が進むとともに、その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964年4月1日に、東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来、整備拡充が進み、今日では16部門の研究所に成長しました。



# 組 織



職員数

(1983年5月1日現在)

区分	教 授	助 教 授	講 師	助 手	その他の職員	計
定 員	(2) 15	15	0	9	33	(2) 72
現 員	(2) 15	14	0	10	33	(2) 72

( )は外国人客員数を外数で示す



## 運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に答えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第10期(1983.2~1985.1)の運営委員は現在以下の通りです。

荒松雄	津田塾大学教授	谷泰	京都大学教授
池田修	大阪外国語大学教授	田町常夫	九州大学教授
石川栄吉	東京都立大学教授	富川盛道	所員
伊東檄	東北大学教授	中根千枝	東京大学教授
井上和子	国際基督教大学教授	西田龍雄	京都大学教授
大江孝男	所員	林栄一	大阪外国語大学学長
岡田英弘	所員	坂野正高	国際基督教大学教授
小沢重男	東京外国語大学教授	三根谷徹	国学院大学教授
黒柳恒男	東京外国語大学教授	護雅夫	日本大学教授
小泉文夫	東京芸術大学教授	矢内原勝	慶応義塾大学教授
柴田武	埼玉大学教授	山田信夫	京都女子大学教授
祖父江孝男	国立民族学博物館教授	渡部忠世	京都大学教授

## 専門委員会

また、所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会が二つあり、それぞれ所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1983年度の委員は以下の通りです。

### 研修委員会

相浦杲(大阪外国語大学教授)、池上二良(北海道大学教授)、池田修、大東百合子(津田塾大学学長)、小沢重男、黒柳恒男、柴田武、柴田紀男(天理大学助教授)、西田龍雄、半田一郎(東京外国語大学教授)、松山納(国際大学教授)

### アフリカ学術調査委員会

伊谷純一郎(京都大学教授)、大森元吉(国際基督教大学教授)、小田英郎(慶応義塾大学教授)、門村浩(北海道大学教授)、河合雅雄(京都大学教授)、中村弘光(アジア経済研究所)、長島信弘(一橋大学教授)、和崎洋一(富山大学教授)

# 職 員

所長 (併) 梅 田 博 之

研 究 部 (五十音順)

- |                          |                           |
|--------------------------|---------------------------|
| 教授 飯 島 茂：異文化の接触          | 助教授 池 端 雪 浦：フィリピン史        |
| 教授 石 垣 幸 雄：文論            | 助教授 石 井 溥：南アジアの人類学        |
| 教授 梅 田 博 之：朝鮮語           | 助教授 加賀谷 良 平：音響音声学         |
| 教授 大 江 孝 男：朝鮮語           | 助教授 上 岡 弘 二：イラン語          |
| 教授 岡 田 英 弘：東アジア史         | 助教授 川 田 順 造：西アフリカ社会       |
| 教授 北 村 甫：チベット語           | 助教授 辻 伸 久：中国語および中国の諸言語    |
| 教授 坂 本 恭 章：アウストロアジア諸語    | 助教授 内 藤 雅 雄：インド近代史        |
| 教授 富 川 盛 道：アフリカの社会と文化    | 助教授 中 嶋 幹 起：中国語           |
| 教授 中 村 平 次：インド現代史        | 助教授 中 野 暁 雄：セム・ハム諸語       |
| 教授 奈 良 毅：インド・アリア諸語       | 助教授 永 田 雄 三：トルコ史          |
| 教授 橋 本 萬太郎：シナ・チベット諸語     | 助教授 松 下 周 二：アフリカの言語       |
| 教授 原 忠 彦：イスラム教徒社会        | 助教授 守 野 庸 雄：日本語・スワヒリ語対照研究 |
| 教授 日 野 舜 也：アフリカ都市社会の比較研究 | 助教授 家 島 彦 一：イスラム中世史       |
| 教授 三 木 巨：イスラム近代史         | 助教授 湯 川 恭 敏：理論言語学、バントゥ諸語  |
| 教授 山 口 昌 男：文化記号論         | 助 手 梶 茂 樹：バントゥ諸語          |
|                          | 助 手 新 谷 忠 彦：言語哲学          |
|                          | 助 手 高知尾 仁：象徴論             |
|                          | 助 手 中 沢 新 一：チベット仏教の人類学的研究 |
|                          | 助 手 中 見 立 夫：内陸・東アジアの国際関係史 |
|                          | 助 手 羽 田 亨 一：イラン史          |
|                          | 助 手 松 村 一 登：フィン・ウゴル諸語     |
|                          | 助 手 水 島 司：南インド近・現代史       |
|                          | 助 手 森 幹 男：インドシナ比較文化史      |
|                          | 助 手 山 本 勇 次：東南アジアの文化人類学   |



カーバ (*Piper methysticum* Forst. f.) の生木。フィジーでの儀礼には欠かせない。(フィジー：新谷忠彦)

事 務 部

事務長 坂 元 治  
 文部事務官  
 事務長補佐 宮 森 てる子  
 文部事務官

庶 務 係

係 長 石 橋 徳三郎  
 文部事務官  
 秘書主任 井 上 由美子  
 文部事務官  
 文部事務官 関 根 彰  
 文部事務官 福 井 光 雄  
 文部事務官 谷 川 かつ子  
 (タイピスト)  
 文部技官 埜 和 雄  
 (自動車運転手)

会 計 係

係 長 鈴 木 邦 叔  
 文部事務官  
 会計主任 佐 藤 秀 規  
 文部事務官  
 文部事務官 成 瀬 智  
 文部事務官 乙 訓 寛 雅  
 文部事務官 藤 井 貞 人  
 文部事務官 荒 井 義 安  
 (守 衛)  
 用 務 員 植 田 カツエ

研修・情報処理係

係 長 浅 見 義 則  
 文部事務官  
 文部事務官 岡 田 ほなみ  
 文部事務官 中 嶋 弘 子  
 文部技官 今 井 健 二

渉 外 係

係 長 阿 部 吉 弘  
 文部事務官  
 文部事務官 松 岡 環  
 文部事務官 佐久間 敬 喜

共同利用係

係 長 名 倉 武二郎  
 文部事務官  
 共同利用主任 田 川 恵 二  
 文部事務官  
 文部事務官 津 田 貞 子  
 文部事務官 金 井 京 子  
 文部事務官 大 村 和 子

図 書 係

係 長 小 倉 三 郎  
 文部事務官  
 図書主任 石 川 恵 子  
 文部事務官  
 文部事務官 中 川 陽 子  
 文部事務官 鈴 木 喜 久 子  
 文部事務官 須 郷 知 子  
 文部事務官 山 木 宏 明



上：カーバの根を乾燥させたもの。(フィジー：新谷忠彦)  
 右：乾燥させたカーバの根(場合によっては茎も)を小さな鉄製の臼でついて粉にし粉末になったカーバを布でこしてこれを飲用する。漢方薬の趣？(フィジー：新谷忠彦)





# 研 究 活 動

## 共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行うとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1983年度のプロジェクト（カッコ内は研究代表者）の研究計画と共同研究員は以下の通りです。

### 言語研修（大江孝男） 所員 14名

本年度は東京会場において、フィンランド語とチベット語を、大阪会場（大阪府商工会館）においてはバンジャープ語の研修を行う。

専門委員会は5月と翌年3月の2回、専門委員・共同研究員の合同研究会（成果報告検討会）を9月に1回、CAI開発研究班の研究会を6月、9月、12月に各1回ずつ開催する。なお教材作成及び研究連絡打合わせのため研修実施言語に関係の深い共同研究員が、東京と大阪で各々2回会合する。

以上の事業を通じて当研究所で実施している「言語研修」に関する諸問題、即ち研修のあり方、実施言語の選定のしかた、実施計画、テキストの構成、語学教育の方法、評価法、視聴覚教材導入の方法等を検討するとともに、研修自動化のための実験的研究、さらに研修の基礎となるアジア・アフリカ諸言語と日本語との対照研究を行う。

大坪一夫	庄司博史	溝上富夫	吉川武時
荻島 崇	庄司ミーア	村崎恭子	
奥田ライヤ	テンパ・ギェンツェン	山口瑞鳳	
小泉 保	星 実千代	山下アルミ	

出版物：言語研修テキスト（20言語、全69冊）

### 辞典編纂プロジェクト（橋本萬太郎） 所員 6名

電子計算機により、中国語、チベット語、クメール語、タイ語、満州語、その他の語彙資料を整理し、音韻論的、意味論的分析を行い、辞典編纂のための基礎的資料をつくる。

中国語部会は、1982年度より三年計画で、漢字資料の一般的処理を目的として、最少一万字を対象とした網羅的な字音音付け作業を計画し、その第一段階として、1982年度は漢字音音付けの範囲と規模の調査・選定、及び字音整理の枠組みの設定を行った。本年度は、選定された字音資料のカード取りと歴史的背景の研究を行なう。尚、1984年度にその編表と成果の刊行をはかりたい。

クメール語部会は年3回程度の研究会を予定している。

阿辻哲次	岩田 礼	落合守和	神田信夫
雨堤千枝子	鶴殿倫次	オリガ・ザビヤロバ	木村英樹
池沢実芳	遠藤由里子	金子真也	クリスティン・
石沢良昭	太田 斎	辛島 昇	ラマール
伊東照司	尾崎雄二郎	川本邦衛	慶谷壽信



佐々木 猛	武信 彰	平井勝利	松尾良樹
志村良治	辻本春彦	平田昌司	松村 潤
荘司格一	富平美波	吹抜悠子	松村文芳
杉村博文	長尾光之	福田権一	三上直光
鈴木和子	中川正之	星 実千代	望月八十吉
鈴木勝則	花登正宏	本名信行	森 博達
高田時雄	原田寿美子	マイケル・シェラード	守屋宏則
高橋 保	氷上 正	増野 仁	渡辺茂彦
出版物：アジア・アフリカ語の計数研究 1～21			峰岸真琴

**言語処理研究** (松下周二) 所員 6名

1. アジア・アフリカ言語文化研究所コンピューターシステムに対するソフトウェアサポート

画像処理、漢字処理、パターン認識など、研究所のスタッフだけではカバー出来ない分野のソフトウェアを共同研究員などの協力を得て開発し、あるいは移植をはかります。

2. CAI (Computer Aided Instruction)

外国語学習及び外国人の日本語学習における CAI の利用についての共同研究を行います。

井上史雄	荻野綱男	杉田繁治	堀口秀嗣
上田博人	沢村正信	中島 久	
及川昭文	清水克正	八村広三郎	

**アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究** (三木 亘) 所員10名

1. イスラム世界の諸地域および諸生活類型を基層文化の側面から研究する。
2. 今年度は前年度に引き続き、基層文化のなかでも食の分野を中心とする。
3. 現状、歴史的過去を問わず、イスラム世界の人々の常食や料理、それに関する文化ばかりでなく、食の対象となる植物性・動物性その他さまざまなものの生産・流通などの構造的な問題、歴史的な変遷、またそれらに係わる象徴体系など多角的な面から検討する。

岩見 隆	駒野欽一	田村愛理	堀内正樹
岡田恵美子	佐々木 徹	ツイオン・ベン・シムエル	松原正毅
片倉素子	佐藤次高	柘植洋一	宮治美江子
禿 仁志	塩尻和子	津野幸人	森川孝典
私市正年	清水宏祐	浜畑祐子	山形孝夫
小西正捷	鈴木 董	原 隆一	山本太平

出版物：「イスラム化」に関する共同研究報告 1～7

*Studia Culturae Islamicae* 1～20

**アフリカ学術調査** (富川盛道) 所員 12名

アフリカ学術調査プロジェクトは、昭和55年度までは、大サバンナ地帯を主要対象としてきたが、昭和56年度からは、この成果を基礎に、大サバンナ地帯に推移するスーダン・サーヘル地帯を主要対象にとりあげ、現地調査をふくむ地域研究の共同研究プロジェクトをおこなっている。この調査研究においては、スーダン・サー

ヘル地帯の各地に分散する、ハウサ・フラニ語のリングワ・フランカ地域もしくはその文化複合地域を中心に、各集団の移動にともなう集落および地域の形成過程を、生態的環境、移動の口頭伝承および住民史、リングワ・フランカおよび各言語接触の動態、部族関係および都市・村落関係の動態、等の側面から各専門分野の共同研究によって、「地域の構造」を明らかにしようとする。昭和57年度には、文部省科学研究費補助金により、第一次の本調査をおこなったが、本年度はその調査結果を基礎に、より総合的な研究を共同研究会の活動によって継続する。研究会はまた、これまでの成果の一部をとりまとめて刊行する作業をおこなう。

上田 将	岸田袈裟	端 信行	渡辺公三
上田富士子	佐藤 俊	福井勝義	和田正平
江口一久	島田周平	堀 信行	
岡崎 彰	田中二郎	松園萬亀雄	
小川 了	中村和郎	和崎春日	

出版物：アフリカ部族社会の比較研究 1～2

African Languages and Ethnography 1～16

アフリカ社会の形成と展開, 1980

#### 南アジアの大河流域における農村社会の研究 (原 忠彦) 所員 5名

1. 1981年度のインド・タミルナードゥ農村調査(第二次)の諸成果に関しては、従来通り、辛島研究員を中心とする歴史編と原所員を中心とする現状編の二つに区分して、順次刊行していくことにする。その際にそれぞれの参加メンバーによる報告会をもち、研究会には外部(研究参加者以外)の関係者にも呼びかけ、立ち入った討論を提起し、論点の掘り下げを行うことはいうまでもない。その研究会は定期的に数回もつことを予定している。
2. 以上の作業と同時に、1982年度以降に予定されているバングラデシュ、スリランカーでの現地調査を成功させるために文献研究を中心とする予備研究活動を組織的に進め、かつ、バングラデシュに関しては、1983年に第一次実地調査を行う。そのための特別研究会等も必要に応じて召集するものとする。
3. 上記に関連して、研究成果の刊行を期する。その細目は新年度の開始時に確定するものとする。

白田雅之	桐生 稔	佐藤 宏	中村尚司
海津正倫	小西正捷	谷口晋吉	柳沢 悠
辛島 昇	菱口善美	徳永宗雄	

出版物：南アジアの大河流域における農村社会の研究 1～5

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India 1～5

Socio-cultural Change in Villages in India Part I～II

#### ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究 (飯島 茂) 所員 6名

1975～76年度には、文部省科学研究費補助金(海外調査)により、「中国・インド文明接触地帯における自然、生態と文化に関する調査」をおこなった。とりわけその接触過程が典型的に観察される地域として、1977～78年度にはヒマラヤ・チベットに焦点をあて、言語、文化、社会に関する総合調査をおこない、その成果の上に、1980年度には科研(海外学術調査)により、第一次の「ネパールにおける国民形成の人類学的・言語学的調査」をおこない、1982年度には、第二次調査をおこな



うことができた。さらに1984年度には第三次調査を予定している。

本年度の共同研究は、これまでの研究成果をふまえて、さらに1984年度に予定されている調査の具体的計画を作成する予定である。

関根康正	西 義郎	前田 縁	山口瑞鳳
立川武蔵	西田龍雄	三瓶清朝	
長野泰彦	星 実千代	御牧克己	

出版物：ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK 1～6  
Monumenta Serindica 1～10

**アジアの民族運動とその国際関係** (中村平次) 所員 4名

1. 戦間期アジアの民族運動の多様な発展を国際関係の発展のなかで追究するものとする。とくに、諸地域における民族自決と主権回復の思想形成と国際的な連帯の発展という二点について、留意するものとする。
2. 他方、第二次大戦後のアジアの諸発展を国家建設と民主主義の問題、さらに、国際関係の面における主権国家間の新しい問題に重要な関心を払うものとする。そこでは、国家の権力規定と政権の性格規定の相互関係に留意する。
3. 以上の狙いを実現するために、年に2回の定例研究会を持ち、参加者の意志疎通を円滑にする一方、報告をめぐり、討論を深めるなかで、認識を新しくする。

伊藤秀一	木村卓司	中村 義	山内昌之
今井昭夫	木村英亮	八尾師 誠	由井正臣
小田英郎	桐山 昇	藤田 進	吉村慎太郎
金子 勝	四宮宏貴	前川輝光	
木畑洋一	清水 透	松本脩作	

**アジア・アフリカにおける象徴と世界観の比較研究** (山口昌男) 所員 3名

アジア・アフリカおよびアメリカの土着社会の説話・神話儀礼を特に時間・空間観念との関連において研究し、この方面における比較研究および民族学・神話学および言語学的分野間の方法論的接合点を探る。

青木 保	上野千鶴子	清水昭俊	原 広司
阿部年晴	大室幹雄	坪井洋文	宮田 登
市川 浩	木田理文	長島信弘	横井 清
市川雅章	栗本慎一郎	中村雄二郎	

出版物：Performance in Culture 1～2

**言語文化調査票** (石垣幸雄) 所員 12名

目的：アジア・アフリカ言語文化研究所言語・文法調査票研究作業と補い合う超語意文法事象採集記入簿の第一次案作成

方式：第一次3年計画第3年度、総員式省エネ型実験的ミニプロ

- 1) 個別対話交信
- 2) 総会年2回

成果：1-1 水生動物名(昨年度) }  
1-2 食用植物名( " ) } → 団語集  
1-3 有害生物名(本年度) }  
1-4 野生鳥類名(次年度) }

- 2 — [第二次] → 成句集  
 3-1 ことわざ集 (初年度) → 格言集  
 金 東俊 星川清親

出版物: Phraseological Questionnaire 1-1, 1-2, 3-1

**アジア・アフリカ諸言語の研究 (奈良 毅) 所員 14名**

アジア・アフリカの諸言語を音韻, 文法, 語彙等の各面から研究する。

所員, 共同研究員, 協力者は上記の班のいずれかに参加し, 各班とも週ないし月に一度程度の会合を持ち, 共同研究を行い, かつ年に一~二度の総会を持つ。研究成果は年報等の形で公にする。各班の今年度の研究計画は次の通りである。

音韻班: 1982年度に引き続き, 諸言語の *suprasegmental* な現象を, 現地調査にもとづいた発表を通し, 比較研究する。

文法班: 文法調査表の作成をめざし, 諸言語の文法構造の輪郭を各専門家が呈示し言語の文法についての知識を集約するとともに, どのようなことがらが文法調査に含まれるべきかを討論する。

語彙班: 1982年度に引き続き, アジア・アフリカ諸語の語彙調査を目的とするハンドブック作製の為の共同討議を行う。

アミール・モハバット	杉田 洋	早田輝洋
岩田 礼	田村すず子	原 誠
上野善道	チャールズ・モリスン・デウルフ	福原信義
大島 稔	土田 滋	溝上富夫
大野 徹	津曲敏郎	三谷恭之
奥平龍二	徳永宗雄	宮岡伯人
小田真弘	鳥羽季義	村崎恭子
カリヤン・ダスグプタ	富田健次	森口恒一
近藤達夫	中島 久	藪 司郎
崎山 理	長 弘毅	山田幸宏
柴田紀男	縄田鉄男	吉川 守
下宮忠雄	橋本 勝	

出版物: アジア・アフリカ文法研究 1~11

アジア・アフリカ文法便覧 32冊

**口頭伝承の比較研究 (川田順造) 所員 5名**

口で語る, 口で伝えるということが, 他の表現・伝達手段——文字, 図像, 音楽, 身体表現 (舞踊, マイム等) など——との関連でもつ意味を広い視野での比較によって検討する。このため, いわゆる口頭伝承の研究者だけでなく, 言語学, 文学 (古代文学, 説話文学, 語りもの等), 歴史学 (口頭伝承と文字記録の歴史上の位置等), 美術史・図像学 (曼陀羅などの絵解きも含む), 音楽 (とくに語りもの, うたいものの音楽的側面), 舞踊, 等の研究者に広く参加を求め, 学際的交流の中での探索を試みる。

阿部謹也	大谷紀美子	君島久子	徳丸吉彦
雨宮裕子	大貫良夫	小松和彦	友枝啓泰
伊藤亜人	大林太良	柴田南雄	新倉朗子
江口一久	小沢俊夫	柘植元一	新倉俊一



西江雅之	福島邦夫	山口 修	横道萬里雄
野村純一	堀内 勝	山本真鳥	若桑みどり
林 雅彦	宮田 登	山本吉左右	

**内陸アジア史文字資料の研究** (岡田英弘) 所員 2名

内陸アジアの諸民族の歴史の現地語資料による研究は、過去20年間に急速に発達し、それぞれの専門の研究者が輩出しているが、内陸アジア史全体としての構成は、今後の課題として残されている。この点に鑑み、満洲語、モンゴル語、トルコ語、チベット語、ペルシア語等、内陸アジア史の資料となるべき文献に通じた歴史学者を集めて共同研究プロジェクトを組織し、個々の直接の専門地域を超えた全体的史観の樹立に資するため、年3回の会合を開いて、それぞれの領域における文字資料のあり方を討論し、その成果を集録して、一般研究者のためのマニュアルを作成する。

石橋崇雄	佐口 透	本田実信	森川哲雄
梅村 坦	清水宏祐	松村 潤	山口瑞鳳
神田信夫	志茂碩敏	間野英二	山田信夫
北川誠一	浜田正美	宮脇淳子	
小山皓一郎	細谷良夫	護 雅夫	

## 共同研究員 (公募)

1978年度より、共同研究プロジェクト(6ページ~11ページ)とは別に、当研究所において一定期間研究を行う共同研究員を公募しており、現在まで次の諸氏に委嘱しています。

氏名	所属	研究テーマ	指導教官
1978年度：小馬 徹	文教大学非常勤講師	スワヒリ語の構文と統語法の研究	守野教官
四宮宏貴	北海道大学大学院	インド・パキスタン分離独立の史的研究	中村教官
平戸幹夫	拓殖大学助教授	マレー農村社会におけるイスラム教	三木教官
村上泰子	国際基督教大学大学院	統治論および音韻論の諸規則にいかん意味の介入がおこなわれているか?	橋本教官

氏名	所属	研究テーマ	指導教官
1979年度：遠藤保子		未開民族における舞踊の機能と構造について	山口教官
木田理文	慶応大学大学院	近代早期社会における民衆運動の人間観に関する比較研究	山口教官
信森廣光	福山市立女子短期大学教授	現代マルタ語と北アフリカ諸言語における言語文化に関する総合研究	中野教官
福島邦夫	慶応大学大学院	民間説教者と言語芸術	川田教官
宮脇淳子	大阪大学大学院	十七世紀のハルハモンゴル	岡田教官
1980年度：堀川 徹	京都大学助手	中央アジアとイスラム 16～18世紀中央アジアのイクターについて	永田教官
宮脇淳子	大阪大学大学院	15～17世紀の北アジア史研究	岡田教官
山下晋司	広島大学講師	象徴と世界観に関する研究	山口教官
山本真鳥	東京大学大学院	言語文化比較研究資料	北村教官
1981年度：井谷鋼造	京都大学助手	オスマン・トルコ語史料の研究	永田教官
内堀基光	岐阜大学講師	サラワク・イバン族の英雄民話圏における象徴と世界観	山口教官
川瀬豊子	日本学術振興会研究員	古代イランの社会構造に関する研究	上岡教官
安元直子	九州大学大学院	マレー伝統社会のリーダーシップ構造	池端教官
1982年度：石上悦郎	東北大学助手	独立インドの国家建設と工業化計画の研究	中村教官
川崎有三	東京大学大学院	満州語の研究	橋本教官
高谷紀夫	鹿児島大学助手	稲作文化の比較研究	飯島教官
浜畑祐子		イランの暦法と祭り	上岡教官
松村文芳	神戸商科大学助教授	漢字の機械処理に関する調査研究	橋本教官
宮坂敬造	大阪大学助手	文化テキストとしてのことわざの比較分析	山口教官
1983年度：加藤 栄	一橋大学大学院	現代ベトナムにおける《Tho' mòi》評価の新しい動向について	森 教官
吉田憲司	大阪大学大学院	アフリカ諸文化における色彩語彙ならびに色彩象徴に関する比較研究	富川教官
Mohammad Naghizade	京都大学招へい外国人学者	The Agrarian Aspects of the Iranian Revolution—With Special Reference to the Rural Institutions and Farmers' Organization	上岡教官
堀川世津子		イラン立憲革命におけるジャーナリズム	羽田教官
松原孝俊	九州大学助手	口頭伝承の比較研究	川田教官





上左：ポカラはネパール第2の多民族都市である。なかでもグルン族は、男は勇敢な兵士として、女は美人で有名である。グルン族の女は踊りの名手ぞろいだから、町中の人気者だ。(山本勇次)

上右：土中に穴を掘り真っ赤に熱した石を使って材料をむし焼きにするフィジー式オーブン。(フィジー：新谷忠彦)

右：北カメルーン、フルベ族の若い女性。フルベ族は、皮膚の色が淡く、目鼻だちのはっきりした美人がおおい。敬虔なイスラム教徒であるフルベ女性は、16才位で結婚する。(日野舜也)



## 研 究 生

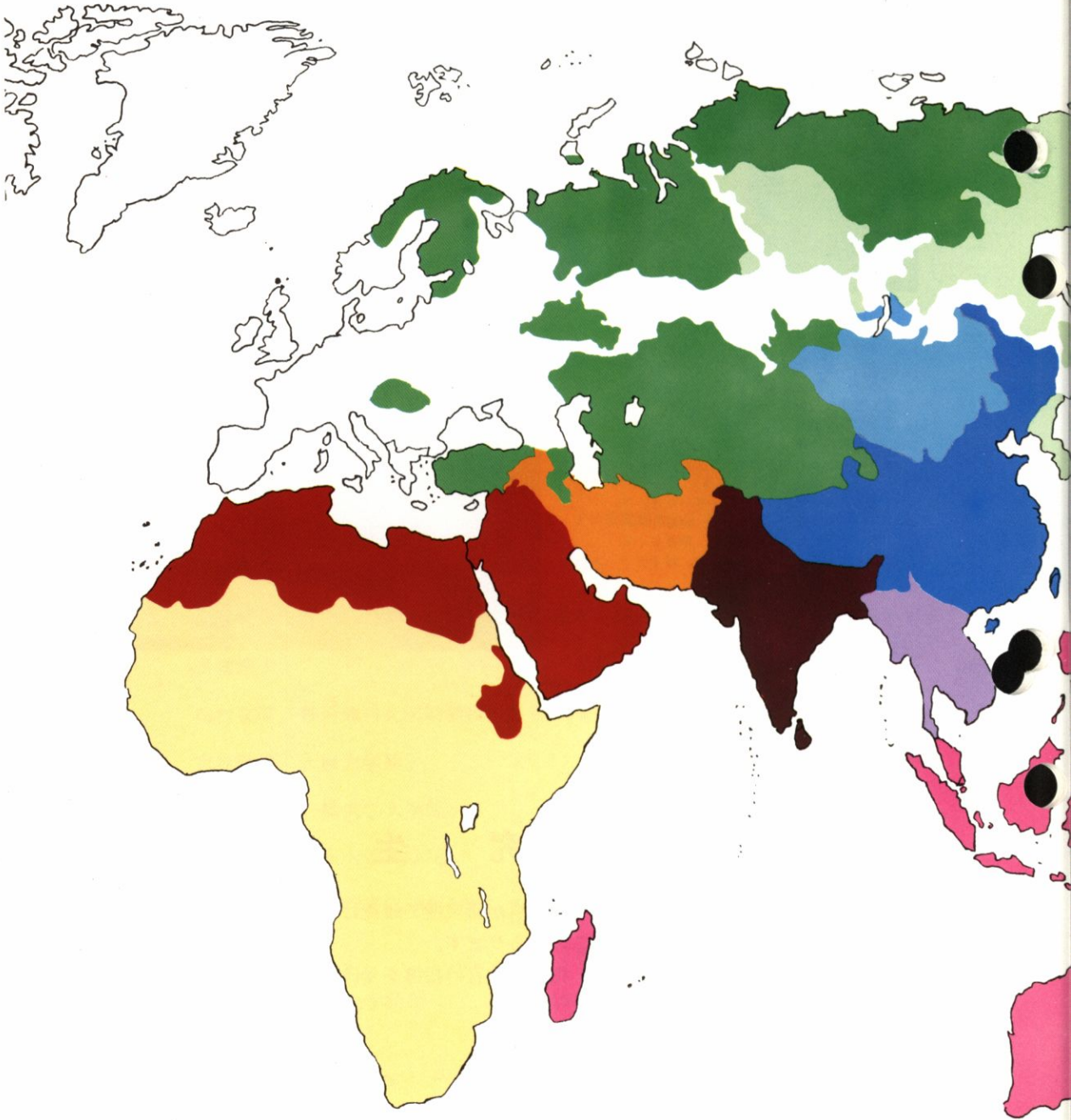
大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。

研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。

1983年度

氏 名	研 究 テ ー マ	指 導 教 官
浦 山 勇之輔	アジア民族演劇の比較研究	山 口 教 官
マリリン・アイビー	日本の国内観光についての文化人類学的研究	山 口 教 官
山 本 久美子	シャー・ナーメに於ける世界観	上 岡 教 官

# 研究部門図





研究部	研究部門 (開設年度)	研究分野または対象とする言語文化
一般	言語文化第Ⅰ (1964年度)	一般言語学理論・文法記述理論・語彙記述理論・コンピュータ言語学・一般音声学理論・音素論・音声実験理論など
	言語文化第Ⅱ (1967年度)	民族学・歴史学・地理学など
	言語文化第Ⅲ (外国人客員研究部門) (1979年度)	言語・文化, 民族学, 歴史学, 地理学等の分野における, 特に現地人研究者又は現地研究の欧米専門家との共同研究による地域研究法の開発
東アジア	東北アジア (1966年度)	朝鮮語・ツングース語(満洲語・その他のツングース語)・極北諸語(チュクチ語・ユカギル語・ギリヤーク語・アイヌ語など)および文化
	中国第Ⅰ (1968年度)	中国諸方言(北京語・呉語・福建語・広東語・客家語など)および文化
	中国第Ⅱ (1979年度)	チベット語(現代チベット語・チベット文語など)・イ語(口語)・チュワン語・回族の諸言語などおよび文化
北および中央アジア	モンゴル・シベリア (1982年度)	モンゴル諸語(ハルハ方言・ブリヤート方言等)・カルムイク語・モングオル語・ダグール語・モゴール語および文化
	トルコ・ウラル (1971年度)	チュルク諸語(トルコ語・オスマン語・ウイグル語・ウズベク語・タタール語・チュウヴァシ語・ヤクート語など), ウラル諸語(フィンランド語・エストニア語・ハンガリー語・サモエード諸語など)および文化
東南アジア	インドシナ第Ⅰ (1964年度)	ベトナム語・タイ語・ラオス語などおよび文化
	インドシナ第Ⅱ (1969年度)	ビルマ諸語・モン語・カンボジア語などおよび文化
	インドネシア・オセアニア (1967年度)	インドネシア語(マライ語)・ジャバ語・タガログ語・ビサヤ語・マラガシ語・メラネシア諸語・ポリネシア諸語・パプア諸語などおよび文化
南アジア	インド第Ⅰ (1965年度)	ヒンディー語・ウルドゥー語・ベンガル語・マラーティー語・クジャラーティー語・シンハリー語・サンスクリット語・バーリ語などおよび文化
	インド第Ⅱ (1978年度)	ドラヴィダ諸語(タミル語・テルグ語・カンナダ語・マラーラム語)・ムンダ諸語および文化
西アジア	イラン (1972年度)	ベルシア語・クルド語・バルーチー語・バシュトー語・アルメニア語・グルジア語などおよび文化
	アラビア (1966年度)	イラク方言・シリア方言・エジプト方言・マグリブ方言・アラビア文語・ヘブライ語(現代ヘブライ語・旧約ヘブライ語)・アラム語・アムハラ語などおよび文化
アフリカ	アフリカ (1964年度)	ハウサ語・フラ語・チュイ語・ヨルバ語・イボ語・メンデ語・マンディンゴ語・スワヒリ語・リンガラ語・ファン語・ズル語・ホサ語・ソト語・ショナ語・ルアンダ語・ガンダ語・アフリカーンス語・ガラ語・ソマリ語・ベルベル語などおよび文化



# 言語情報機械処理

現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して、アジア・アフリカの諸言語のデータを大量に機械処理し、それぞれの言語の音韻論的、辞学的、統辞論的分析はもちろんのこと歴史的、民族的、社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータ・ベースの作製をはかっています。当研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち遅れを克服し、またアジア・アフリカ諸国との多面的、多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用にも供されます。この目的のために、一方で各言語のデータについて一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、語彙論的情報を分析・形式化し、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいうようにプリント・アウトするために、デーバナーガリー、ビルマ、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングルなどの文字フォントを作製し実際に使用しています。実際の言語の例としては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、フラ語、ヨルバ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語などのデータが蓄積されつつあります。

## 言語データのプリント・アウト例 (上：ペルシア語、下：チベット語)

زبان آدم های که شبیه ما هستند بودند گدای بکنند و اگر رفیب دیگری پیدا نشود که او را بتاراند ،	HED0SAG02304
اعلاً خلع سلاح میکنیم و قداره اش را براداریم که اگر زنده شد ما را قتل عام نکند و جواهرات را با	HED0SAG14301
برای سرگرمی مشغول درختن آن شد فکر میکرد اگر زرش آنجا بود این کار زنانه که هرگز ناسته فا	HED0SAG25206
اگر زیر سایه اتومبیل پناه میبرد ،	HED0SAG01314
این جمله را سر مشق خویش قرار داده بود که : ( اگر سخن زر است ،	HED0SAG21706
ببخشید اگر سوالات بنده کمال کننده است فقط از لحاظ کنم	HED0SAG24403
اگر شده هفت درو به دیگ محتاج بکنم معارجمش	HED0SAG03802
اگر غیر از این بنامد چیز مضحک و باور نکردنی خ	HED0SAG14612
اخلو محبوسین تا شهر دو ساعت راه بود درین راه اگر کسی به ما بر می خورد ، کاتباً با من روسی	HED0SAG11609

TIAAAAAA05504 འཛིན་སྐྱོར་དངོས་འབྲེལ་ཇི་ཉུར་ཡང་སྐྱུང་གཏམ་ཞིག་ཡིད་པ་དེའི་འཛིན་ཤོག་གུངས་ནང་མིས་ཡོད།

TIAAAAAA05505 མཐོ་བོང་གཉིས་ཀེར་བ་ནི་གུས་ཞབས་བྱས་པ་མ་རེད། ལྷ་མཁུན་ཞེས་འུ་བྲུག་གིས་རེ་འདུན་བྱེད་

མཐོ་བོང་ཞིག་རེད།

TIAAAAAA05506 ཡང་འབྲིགས་ཤག་དང་། འུས་ཤག་ཟེར་དུས་སྐབས་རེ་མཐོ་བོང་ཀེར་བའི་སྐྱོལ་ཡོད་ཀྱང་། རི་

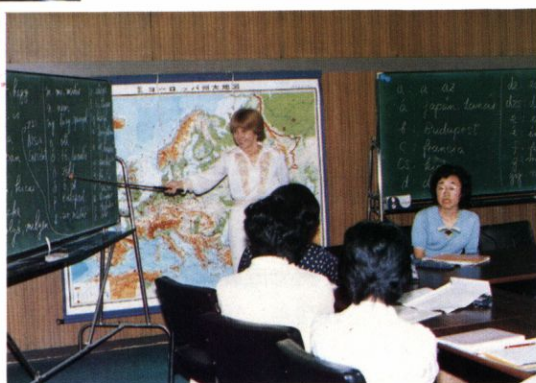
ཚོ་ནས་འགྲུར་སྟོན་སྟངས་ནས་ཉ་གོ་བྱུང་གྱི་རེད།

TIAAAAAA05507 མི་ལོ་བའི་ཇིས་མཐུག་དང་། བྱང་པོ་སྐྱེལ་སྟངས་སྐྱོར།

# 言語研修



上：アラビア語  
右：ハンガリー語



アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおこなわれていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からほぼ毎夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、アムハラ語、スワヒリ語、ビルマ語、福建語、チベット語の研修を、それぞれ一言語か二言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行うことになり、当研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者の協力をえて、東京（二言語）と大阪（一言語）で、初級コースを下記のとおり実施してきました。

年度	研修言語名（修了者数）	
1974	東京：朝鮮語(10)、チベット語(12)	
1975	東京：カンボジア語(8)、ベンガル語(12)	
1976	東京：ペルシア語(10)、スワヒリ語(9)；	大阪：ビルマ語(5)
1977	東京：広東語(14)、マラーティー語(6)；	大阪：モンゴル語(18)
1978	東京：タイ語(12)、トルコ語(12)；	大阪：ペルシア語(13)
1979	東京：ハウサ語(8)、ビルマ語(14)；	大阪：タイ語(7)
1980	東京：ネパール語(14)、モンゴル語(14)；	大阪：ベトナム語(5)
1981	東京：ヒンディー語(8)、バシュトー語(10)；	大阪：中国語中級(26)
1982	東京：アラビア語(12)、ハンガリー語(17)；	大阪：フルフルデ語(12)
1983	東京：チベット語( )、フィンランド語( )；	大阪：パンジャブ語( )

全国から公募された各言語約10名の研修生は検定料、入所料、受講料を納付し、全課程を終えた人には修了証書が授与されます。

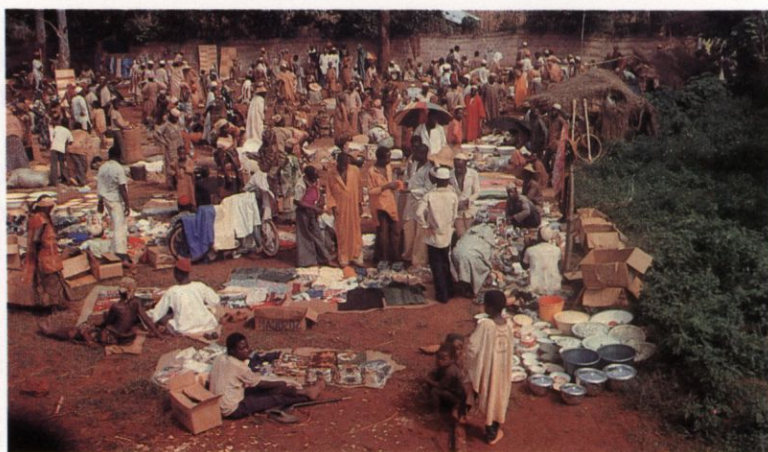
各コースの研修時間は1980年度までは226時間でしたが、1981年度以降は150時間になっています。なお電算機補助による研修プログラム(CAI)の作成について現在具体的な研究と作業が進められています。



## 海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行うことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りです。〔（ ）内は研究代表者〕

- (1) アフリカ部族社会の比較調査  
1969年, 1971年(富川盛道), 1974年, 1976年(日野舜也)
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査  
1970年(岡 正雄)
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動  
1972年(河部利夫)
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査  
1974年, 1977年, 1980年(三木 亘)
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然, 生態と文化に関する調査  
1975年(飯島 茂)
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究  
1979年, 1981年, 1983年(原 忠彦)
- (7) ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査  
——ガンダキ水系諸地域住民のネパール化に関する比較研究——  
1980年, 1982年(北村 甫)
- (8) スーダン・サーヘル地帯における移住と地域形成の調査研究  
——ハウサ・フラニ語圏を中心に——  
1981年, 1982年(富川盛道)
- (9) 環カリブ海地域における複合文化の比較研究  
——アフリカ・アジア系社会・文化空間の変動過程——  
1982年, 1983年(山口昌男)
- (10) アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究  
1983年～(三木 亘)



北カメルーン Mbang Mboum 村の定期市。1週間ごとに巡回してくる市場である。男の売り手と、女の売り手では、その商品も、売る場所も、はっきりわかれている。(日野舜也)



## 助手等の現地投入

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計18名が派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。

- 1967年—1969年 石垣幸雄（エチオピア地区）、守野庸雄（タンザニア地区）  
1969年—1971年 松下周二（ナイジェリア地区）、家島彦一（アラブ連合地区）  
1971年—1973年 内藤雅雄（インド地区）、中野暁雄（モロッコ地区）  
1973年—1975年 福井勝義（ソマリア地区）、中嶋幹起（香港地区）  
1975年—1977年 加賀谷良平（ボツワナ地区）、湯川恭敏（タンザニア、ザイール地区）  
1977年—1979年 石井溥（ネパール地区）、藪司郎（ヒルマ地区）  
1979年—1981年 羽田亨一（イラン、トルコ地区）、清水宏祐（アラブ連合、イラン、トルコ地区）  
1981年—1983年 山本勇次（ネパール地区）、新谷忠彦（ニューカレドニア地区）  
1983年—1985年 辻 伸久（中国、香港地区）、水島 司（インド地区）



死者の儀礼。死者の母方のオジの家系に対し供物を差し出す。（ニューカレドニア：新谷忠彦）

## 外国人研究員

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。現在まで受け入れた外国人研究員は以下の通りです。

- Gordon T. Bowles：アメリカ・人類学 1967. 10. 6～1968. 9. 15  
Muhammad Aḥmad Anīs：エジプト・近代史 1968. 10. 2～12. 25  
Raouf 'Abbās Hāmid：エジプト・近代史 1973. 4. 1～9. 19  
Yellava Subbarayalu：インド・南インド中世史 1973. 10. 1～1975. 10. 31  
Fe Aldave-Yap：フィリピン・フィリピン国語学 1975. 9. 20～12. 21  
金 完 鎮：大韓民国・韓国語学 1975. 8. 20～1976. 7. 31  
Curtis D. McFarland：アメリカ・言語学  
1976. 2. 20～1977. 2. 19, 1979. 10. 1～1980. 9. 30  
'Abd al-Rahīm 'Abd al-Rahmān 'Abd al-Rahīm：エジプト  
中東近代経済史、アラビア語学 1976. 6. 6～10. 4

- Salim Abdulla Wazir : タンザニア・教育学 1976. 6. 4~10. 11
- Bhakti Prasad Mallik : インド・言語学 1976. 7. 13~12. 20
- Karthigesu Indrapala : スリランカ・歴史学 1976. 11. 1~1977. 3. 31
- 俞昌均 : 大韓民国・韓国語学 1977. 4. 1~1978. 1. 31
- Søren C. Egerod : デンマーク・東洋言語学, 古典学 1977. 9. 1~1978. 5. 31
- Bozkurt Güvenç : トルコ・社会人類学  
1978. 5. 17~10. 31, 1980. 10. 1~1981. 9. 30
- Thubten Jigme Norbu : アメリカ・チベット学 1978. 6. 27~1979. 3. 31
- André-Georges Haudricourt : フランス・言語学, 植物学, 民族学  
1978. 10. 2~10. 31
- Maria Lourdes S. Bautista : フィリピン・言語学 1978. 10. 23~1979. 5. 12
- William S-Y. Wang : アメリカ・言語学, 音声学, 神経言語学 1979. 2. 15~7. 14
- Alhaji Faruk Gezawa : ナイジェリア・ハウサ語学 1979. 4. 12~12. 17
- Shyamsunder Joshi : インド・ヒンディー文学 1979. 5. 26~8. 25
- Dor Bahadur Bista : ネパール・社会人類学 1979. 5. 30~6. 20
- Jean-Baptiste Bunkungu : オートボルタ・モシ語学 1979. 6. 1~9. 30
- Paul M. Thompson : アメリカ・中国哲学, 中国文学 1979. 9. 16~1980. 9. 15
- Chandra Mudaliar : インド・国際関係論, 政治学 1979. 10. 1~1980. 9. 30
- Udom Warotamasikkhadit : タイ・言語学 1979. 11. 6~11. 28
- Thomas Sebeok : アメリカ・言語学, 記号学 1980. 4. 13~4. 27
- 傅懋勳 : 中国・言語学, 民族学 1980. 6. 11~1981. 3. 10
- Samuel H. Elbert : アメリカ・ポリネシア諸語 1980. 10. 1~1981. 1. 31
- Kripal C. Yadav : インド・歴史学 1980. 10. 1~1981. 9. 30
- Alain Peyraube : フランス・中国語言語学 1980. 10. 11~12. 10
- 徐在克 : 大韓民国・韓国語学 1981. 5. 25~1982. 3. 15
- Muhammad B. Mkelle : タンザニア・スワヒリ語学 1981. 6. 19~12. 18
- Maurice Coyaud : フランス・中国語言語学 1981. 7. 1~7. 31
- William O. Beeman : アメリカ・人類学 1981. 9. 1~1982. 8. 31
- Marie-Claude Paris : フランス・中国語言語学 1981. 9. 12~10. 11
- Talat Tekin : トルコ・古代トルコ語 1981. 9. 14~1982. 1. 11
- P. A. Narasimha Murthy : インド・政治学, 国際関係論 1981. 10. 1~1982. 9. 30
- Yoshiro Imaeda : フランス・チベット学 1981. 10. 1~1982. 1. 16
- Ernesto Constantino : フィリピン・フィリピン言語学 1981. 11. 1~1982. 10. 31
- Suresh Awasthi : インド・民俗演劇 1982. 2. 1~1983. 1. 31
- Salah A. El-Araby : エジプト・アラビア語視聴覚教育学 1982. 2. 1~1983. 1. 31
- Kiruja Ruchiami : ケニア・ケニア国大統領府学術研究部主任 1982. 5. 1~5. 31
- Mohammadou Aliou : カメルーン・フラ言語学 1982. 6. 1~9. 10
- John G. Hangin : アメリカ・モンゴル言語学 1982. 9. 1~1983. 8. 31
- Isidore Dyen : アメリカ・オーストロネシア比較言語学 1982. 8. 25~1983. 8. 24
- Suriya Ratanakul : タイ・東南アジア諸言語, 言語学 1982. 8. 28~9. 11
- Tuncer Baykara : トルコ・歴史学 1982. 10. 25~1983. 1. 24
- Kanchana Ngourngsi : タイ・言語学 1982. 12. 10~12. 23
- Elmar A. Holenstein : スイス・普遍人類学 1983. 3. 1~1984. 2. 29

# 施 設

## 電 算 機 室



上：電算機室  
右：中国語用漢字字母データ  
撮影中の画像データ  
収録装置



当研究所では、1978年1月から、HITAC M-150 システムを導入し、1983年4月からはM-240Dにグレードアップしました。内部メモリーは6 MB、ディスク装置は2.4GB、磁気テープは3デッキあります。入力にはパンチカード、紙テープ、TSS端末が使えます。出力のためにはラインプリンタの他に漢字プリンタがありますが、これを使用して、大きさも形も様々なAA諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されています。

このほかのソフトウェアとしては単語の用例検索システムが準備されています。これはAA諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままでパンチ、入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

またグラフィック・ディスプレイもあり、AA諸言語の研修の自動化等の開発研究も行われています。

1979年度に導入された画像処理システムは、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に威力を発揮しています。



## 図 書 室

共同利用研究機関としての当研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究に必要な基礎資料を1964年の創設以来毎年購入しています。また海外研究機関（56ヶ国 159機関）との図書交換を通じて研究書・論文集等を収集し、図書室の蔵書総冊数は1982年3月末現在で約42,000冊にのぼっています。

蔵書の中には、アジア・アフリカ諸地域の国語教育資料をはじめ、雑誌(約1,060種)、新聞(約60種)、世界各国語の聖書などが含まれていますが、洋雑誌の整備には特に力を入れ、機会あるごとにバックナンバーを購入し、できるだけ完本でそろえるよう努力を続けています。たとえば、19世紀末から1970年までのイランの主要新聞65種がマイクロフィルム化されているほか、19世紀末に創刊されたベンガル語の主要文芸雑誌5種類のバックナンバーが全部そろっているなど、他の研究機関には見られぬ資料が所蔵されています。

またラングーン大学より寄贈されたビルマ語の文献資料(857冊)をはじめ、東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア・中近東・アフリカ・西欧・東欧・ソ連邦・太平洋地域におけるそれぞれの現地語で書かれた資料が数多くあり、当研究所図書室の特色の一つとなっています。さらに最近外国人研究者のための日本研究資料も積極的に集めだしており、今後海外からの利用者数も増えることが予想されます。

なお利用者の便宜のためマイクロリーダーとリーダー・プリンターが備えつけられています。



上：書庫・閲覧室  
右：イランの主要新聞

# 音声学実験室



上：実験室  
右：吹込室



- 「ヨルバ語のトーンなんですが、基本周波数の動きは？」  
「広東語の声調の上がり下がりを目で見ても確かめたいんですが……」  
「フラニ語ってどんなことばですか？ 実際に録音したのがありますか？」  
「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部分にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。また、めずらしい言語や、貴重な民話・民族音楽などのテープが複写され、ビデオ録画なども利用しながら研究分析を行っています。

また付属施設の“音声・言語研修資料室”には各種の語学レコードおよび録音テープがあり、研究者の利用の便をはかっています。

# 出版物一覽

- アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. \*1(1968), \*2(1969), \*3(1970), \*4(1971), \*5(1972), \*6(1973), \*7(1974), \*8(1974), \*9(1974), \*10(1975), \*11(1976), \*12(1976), \*13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979), 19(1980), 20(1980), 21(1981), 22(1981), 23(1982), 24(1982).
- アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos. 1~47. (1966~83).

## アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ビア・アママーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- \*2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- \*5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
6. NAGATA, Y., *Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
- \*7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasûlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. MCFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
- \*9. MCFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*, 1979.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. MCFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab: 1920—1947*, 1981.
17. EL-ARABY, Salah A., *Teaching Languages to Arab Learners-Methods and Media-*, 1983.

## アジア・アフリカ基礎語彙集

- |                              |  |
|------------------------------|--|
| 1. 山本謙吾, 満洲語口語基礎語彙集, 1969.   | 9. 奈良 毅, <i>Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan Languages</i> , 1979. |
| 2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971.   | 10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979.   |
| 3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972.    | 11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980.   |
| 4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973.    | 12. 新谷忠彦, ラデ語—ベトナム語—日本語語彙, 1981.   |
| 5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974.   | 13. 藪 司郎, アツィ語基礎語彙集, 1981.   |
| 6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975. |  |
| 7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976.       |  |
| 8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977. |  |

## 外国人研究者出版物

1. CONSTANTINO, E., *Isinay. Texts and Translation*, 1982.
2. EL-ARABY, Salah A., *Intermediate Egyptian Arabic-An Integrative Approach*, 1983.

## 共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.



- アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967).
  3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. \*1(1968), \*2(1969), 3(1970), 4(1971), 5(1972), \*6(1973), 7(1982).
  4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
  5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. \*1(1972), 2(1972), 3(1973).
  6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. 1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979), 9(1980), 10(1981), 11(1982).
  7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:
 

No. *11. Korean (梅田博之), 1973. 11z. Ainu (村崎恭子), 1978. *12b. Fukienese (中嶋幹起), 1976. *12z. Tibetan (北村 甫), 1977. 13. Indo-Aryan (石垣幸雄), 1980. 13a. Hindi (溝上富夫), 1980. *13b. Marathi (内藤雅雄), 1976. 13c. Bengali (奈良 毅), 1979. 13d. Khaling (鳥羽季義), 1979. 13e. Panjabi (溝上富夫), 1981. 13x. Tamil (徳永宗雄), 1981. 13y. Malayalam (伊藤正二), 1978. *14a. Cambodian (坂本恭章), 1974. *14b. Burmese (藪 司郎), 1974. *14c. Thai (森 幹男), 1975. *15b. Philippine (山田幸宏, 土田 滋), 1975.	*16b. Samoan (小田真弘), 1977. *17. Persian (上岡弘二), 1976. 17b. Baluchi (縄田鉄男), 1981. 17s. Shughni (縄田鉄男), 1980. *20. African (石垣幸雄), 1975. *21. Swahili (守野庸雄), 1976. *22a. Cushitic (石垣幸雄), 1972. 22b. Ethiopic (石垣幸雄), 1978. *23. Hausa (松下周二), 1974. *26. Fulfulde (江口一久), 1974. 33. Romance & Greek (石垣幸雄), 1973. 33y. Basque (石垣幸雄), 1979. 33z. Maltese (石垣幸雄), 1977. 34a. Albanian (石垣幸雄), 1979. 36. Uralic etc. (石垣幸雄), 1976. 40. USSR Major (石垣幸雄), 1980.
---	--
  8. アフリカ部族社会の比較研究: 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), 2. アフリカ社会の地域性(1973).
  - \*9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1(1974).
  10. アジア・アフリカ語の計数研究, 1(1975), \*2(1975), \*3(1976), \*4(鄒 嘉彦: 老乞大諺解単語索引, 1976), \*5(坂本恭章: カンボジア語小辞典, 1976), \*6(1976), \*7(1977), \*8(1978), \*9(1978), \*10(1979), \*11(1979), \*12(YUE, Anne O., *The Teng-Xian Dialect of Chinese*, 1979), \*13(1980), \*14(藍清漢: 中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(SHERARD, Michael, *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980), 16(1981), 17(傅志勛: 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究<上冊>, 1981), 18(徐琳・木玉璋: 僜僜族《創世記》研究, 1981), 19(1982), 20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, 1982), 21(1983).
  11. *Oceanic Studies*, No. 1(1976).
  - \*12. インド・パキスタン分離独立の史的的研究 資料集 \*1(1976), \*2(1977).
  13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究: 南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979), 5(1980).
  14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究: YAK, \*1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981), 6(1982).
  15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語(1980).
  16. 日本の言語文化研究リプリント・シリーズ, Nos. 1 (飯島茂, 日本からみた "Thailand: A Loosely Structured Social System," 1981), 2(岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
  17. *Phraseological Questionnaire*, Vol. 1 No. 1~2. (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol. 3 No. 1 (*Proverbial*, 1981).
  18. *Performance in Culture*, No. 1 (BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982), No. 2 (AWASTHI, Suresh: *Drama: The Gift of Gods-culture, Performance and Commu-*

## African Languages and Ethnography

- \*1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
- \*2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls-Fèrôbe du Diamaré : Maroua et Pètté*, 1976.
4. EGUCHI, P. K., (tr.), *Shi'r al-Tūba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G/ wi Dialects*, 1978.
8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulbe du Plateau de L'Adamaoua au XIX siècle*, 1978.
9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue—Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemands du Cameroun*, 1978.
13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIX<sup>e</sup> Siecle*, 1982.
15. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
16. NAKANO, A., *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*, 1982.

## Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftliks) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kacem Ali"—*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W., & 'Abd al-Rahîm., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study*, 1977.
8. MIKI, W., HONDA G. & M. Salah Ahmed, *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—タウ調査報告2—, 1979.
10. KAMIOKA, K., & YAMADA, M., *Lārestāni Studies I. Lāri Basic Vocabulary*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary, an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life I—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic*, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (I)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Taj al-Din (D. 1139 A. H. / 1727 A. D.)*, Vol. 1(Arabic Text), Ed. & Notes, 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (I)—Texts in Somali [1]—*, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales in the Lower Egypt (I) — Texts in Egyptian Arabic [1] —*, 1982.
19. MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.

20. YAMAGATA, T., *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt – From the Field Notes on the Coptic Monks' Life –*, 1983.

### Monumenta Serindica

1. IJIMA, S. (ed), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. (compl.), *The Newari Language—A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies 1*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.

### Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages Esnakorai and Peruvalanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的変容——アバドゥライ村の土地所有関係を中心にして——, 1981.
4. SUBBIAH, S., MIZUSHIMA, T., & NARA, T., *Socio Economic Studies of Two Villages ; Mahizambadi and Naykulam, Lalgudi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development—The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu—*. 1982.

### Socio-cultural Change in Villages in India

1. KARASHIMA, N., *Pre-modern Period*, 1983.
2. *Modern Period*, No. 1 (HARA, T., Mizushima, T. & NAKAMURA, H.), No. 2 (KOMOGUCHI, Y. & YANAGISAWA, H.), 1983.

### 言語研修テキスト

- |                                 |                                 |
|---------------------------------|---------------------------------|
| *1. チベット語, 北村甫ほか編, 全5冊(1974).   | 9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977). |
| *2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974).    | 10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977).  |
| *3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975). | *11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978).  |
| *4. ベンガル語, 奈良毅編, 1冊(1975).      | 12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978).    |
| *5. ビルマ語, 大野徹ほか編, 全5冊(1976).    | 13. ペルシア語, 勝藤猛ほか編, 全3冊(1978).   |
| *6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976).  | 14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979).   |
| 7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976).   | *15. ビルマ語, 藪司郎編, 全3冊(1979).     |
| *8. 広東語, 中島幹起ほか編, 全4冊(1977).    | *16. ネパール語, 石井溥ほか編, 全3冊(1980).  |



17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980). 21. パシエト語, 縄田鉄男編, 全3冊(1981).  
 18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980). 22. アラビア語, 中野暁雄, サラーフ・アル・アラビー編, 全2冊(1982).  
 19. 中国語, 大河内康憲編, 1冊(1981). 23. ハンガリー語, 岩崎悦子ほか編, 全2冊(1982).  
 20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全3冊(1981).

## コンピュータ マニュアル シリーズ

1. VSAMEDIT (テキストエディター) 松下周二(1981).  
 2. FONTMAKER (文字フォント作製・修正) 松下周二, 今井健二(1981).  
 3. BUNPOO (文法・文字コード変換) 今井健二(1982).

## 特定研究「言語」出版物

### 「文字と言語」研究資料

1. HASHIMOTO, M. J., *hP'ags-pa Chinese*, 1978.  
 2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化 (資料集), 1978.  
 3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字 (資料集), 1978.  
 4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語「漢字語」語彙集 (I), 1979.  
 5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.  
 6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.  
 7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集 (II), 1980.

### 「AA諸言語と日本語の学習」資料

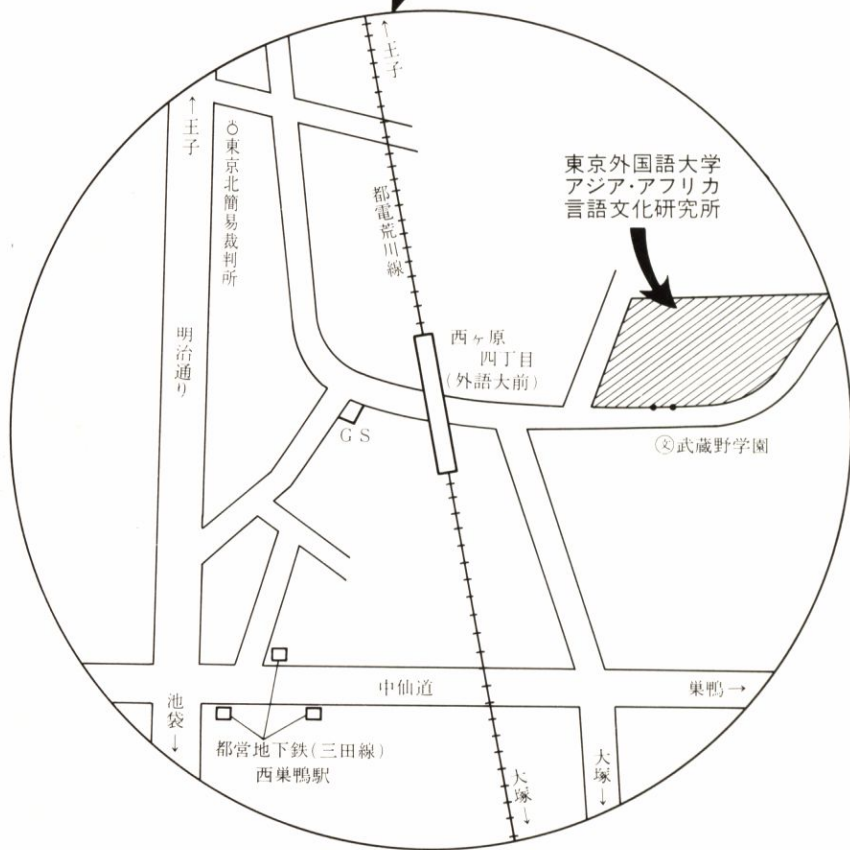
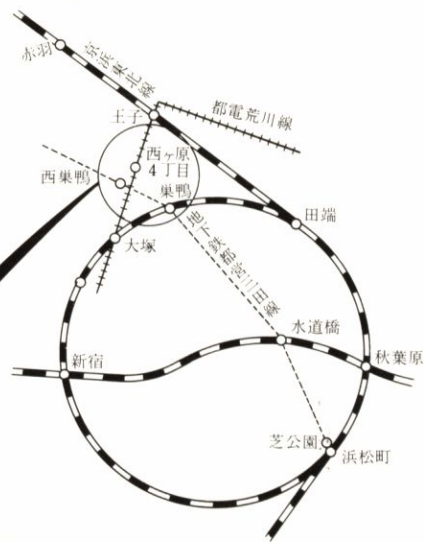
- \*77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語-朝鮮語1, 1978.  
 \*77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語-中国語1, 1978.  
 \*77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語-タイ語1, 1978.  
 78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語-朝鮮語2, 1979.  
 \*78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語-中国語2, 1979.  
 \*78-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語-ヒンディー語1, 1979.  
 \*78-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語-アラビア語1, 1979.  
 \*78-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語-スワヒリ語1, 1979.  
 78-8. 梅田博之ほか: 助詞対照用例集1:「の」日本語-AA諸言語, 1979.  
 \*79-1ab. 梅田博之ほか: 日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.  
 \*79-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語-タイ語2, 1980.  
 \*79-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語-ヒンディー語2, 1979.  
 79-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語-アラビア語2, 1980.  
 \*79-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語-スワヒリ語2, 1980.  
 79-8. 梅田博之ほか: AA諸言語教育基本語彙表, 1980.

上記の出版物は非売品ですが, 著者あるいは編集出版委員会の承認により, 研究機関, 個人研究者に寄贈することができます。

(なお, \*印のものは在庫がありません。)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES  
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA

TOKYO GAIKOKUGO DAIGAKU  
4, NISHIGAHARA, KITA-KU, TOKYO 114  
TEL. 03-917-6111  
Cable Address : GENGOBUNKA TOKYO



**アジア・アフリカ言語文化研究所  
東京外国語大学**

東京都北区西ヶ原4丁目51番21号 〒114

TEL 03-917-6111(代)

国電大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原4丁目  
(外語大前)から徒歩約5分

地下鉄・都営三田線西巣鴨下車15分